

「美しい国日本」を創るには



第一生命経済研究所 名誉所長
加藤 寛

軍隊に召集されていた頃私は奇妙なことにこだわっていた。それは、人間にとって目、耳、足のうちどれが一番不自由になると困るのかということであった。盲目になるとひとりで道を歩けなくなるし、家の中でも見当がつかなくなる。盲導犬もそこまではやってくれない。その点難聴はまだいい。美しい音楽を聴けないとか、信号音が聞こえないという不便はあっても、嫌なことが聞こえないという利点もあろう。

足も、長距離を歩けない登山はできないという難点はあっても、それほど困ることもないだろうなどと勝手な予想をして結局、盲目というのが一番辛いのではないかと結論づけ納得していた。しかしそうなのかどうかは何事も自ら経験してみなければわからない。

やがて身をもって経験する時がきた。耳や目は有り難いことに時折聞こえにくいこともあるし、目もかすんだりするが何とかなる。ところが足のかかとを痛めたことから車椅子に頼ることになった。先進国日本はどこへ行ってもバリアフリーかと思っていた自分がいかに無知であるかを知った。

日本ではやはり航空会社が抜群に面倒見がいい。予約して乗り込んでから目的地で降りるまで実に親切にしてくれる。他の公共輸送機関はまだまだだ。たとえば、車両内の車椅子での移動ができない。手伝ってはくれるがどうもぎこちない。

実はわが研究所が入居するビルの駐車場に段差があってびっくりした。車椅子では動きにくいので、改善をお願いしたところ、すぐ手配をしていただき、立派な段差なしの駐車場になった。また、そのスロープの傾斜を実によく研究してくれて、他の段差なしのスロープと比べて、格段にすべりがいい。日本全国がこうあってくれれば「美しい国日本」となれる。

いよいよ安倍新内閣が発足したが、こんなことにまで心を配ってくれるだろうか。

小泉内閣は、構造改革を目指したが、心配りは少なかった。小泉内閣の構造改革路線に反対するものは抵抗勢力とされた。古い話で恐縮だが、今から六年前、小泉総裁が登場する直前のある日、後に抵抗勢力の中心と言われたある政治家からお呼びがかかった。当時の野村総研の植草氏、リチャード・クー氏と私の三人であった。

「小泉に対抗して総裁に立候補するには何を言ったらよいか」ということであった。私は言うまでもないが「構造改革が第一です」。するとクー氏が言った。「それは間違いです。いま日本は政府も赤字、企業も赤字、家計も赤字。こんな時には赤字をすべて黒字にするよう政府がカネを出せばいいのですよ」。植草氏も同じであった。

小泉氏からも呼ばれた。もちろん構造改革の究極の姿についてであった。

小泉構造改革はまさにその官僚天国打倒をやろうとしたのだが、いま振り返ってみると、官僚部門の行政改革や、公社・公団改革にはかなりメスが入ったとはいえ、抵抗勢力と小泉氏の経済政策はどこまで違ったのだろうか。小泉内閣が不良債権処理に手を打って、その実現に成功したのは事実だし、郵政改革まで踏み込んだのは成功だった。しかし結局は異例なほどの低金利政策を継続し、その間、大手銀行を公的資金で救い続け、国民経済の混乱を防いだ点では、結局クー・植草両氏の政策と大差はなかったのではないか。

日銀総裁・社会保険庁長官・道路公団総裁など、呆れた官僚天国の中核に変化がなければ、国民の信頼が薄れてしまうだろう。岐阜県の裏金づくりを始め、官僚の腐敗は目に余る。「薄汚れた国日本」になる。

安倍総理が「美しい国日本」を創るなら、的場論文のように博物館・美術館の調査を怠ってはならない。つい先日も壁画の色をまもるために封鎖してとうとう色あせた高松塚の事件があったではないか。「美しい国日本」はどんどん汚れていく。独り暮らしの老人の孤独死も無視できなくなってきた（小谷論文）。不招請勧誘の実態も次々と明るみに出てきた（宮木論文）。こうした心配りの研究を重ねていくことが構造改革であるはずだが、安倍内閣の「美しい国日本」の中にこの心配りは含まれているのだろうか。